

# 東アジアの先史農耕

## はじめに

日本列島に展開した農耕文化を考察するときに、これまでは常に水稲耕作と畑作耕作という「二項対立」で捉え、水稲耕作に比重を置いた論調が多かったことは否めない。これは律令以降、「税」の対象として米が扱われたことからもたらされるものであり、とりわけ近世以降の「石高制」で地域の生産性を把握する仕組みが大きくかかわっていたことは否めない。柳田民俗学も水稲栽培こそ日本民族の基本的な生活基盤であるとする点においてその意識の強さを十分に窺うことが可能である。

しかしこれに対して一部の民俗(族)学の方面から畑作栽培の重要性がしばしば指摘され、日本列島の農耕文化は畑作栽培が基本であり、それを基盤として水稲栽培が卓越するようになったとの論説も佐々木高明氏や坪井洋文氏などにより提示され、今日まで根強い支持を得てきている。考古学研究の分野でも、水稲栽培に先行してある種の畑作栽培が営まれていたという推測は古くから提示されてきているし、山崎純男・小畑弘己両氏により、縄文時代の穀物の実証的研究がなされるに至っている。ここでは東北アジアにおいては畑作栽培が基本的な農耕であり、列島に波及して水稲栽培が卓越したことを指摘してみたい。

## 稲作の始まり

栽培稲の最も遡上する確実な事例は、湖南省彭頭山遺跡出土のそれである。住居の壁土や土器の胎土中からイネ粃が検出されており、その所属年代は確かである。それに続く時期として、河南省の賈湖遺跡や湖南省八十競遺跡、それに最近報告された浙江省跨湖橋遺跡などが挙げられる。さらに山東省の泰山の北側でも後李文化に属する稲粃が発掘されていて、紀元前6000年以前に長江から黄河流域にまで稲作栽培が及んでいたことが分かってきた。

一方湖南省の玉蟾岩洞窟や吊桶岩洞窟から一万年前に遡るイネ粃が発見され、プラント・オパールでもそれが裏付けられるとされるが、出土した稲は黄金色を呈していて、決して1万年前のものとは思われない。水中で保存されるか、炭化しない限り1万年という時を経て今日まで伝えられることはありえない。ましてや黄金色を呈したままで残ることはありえないのである。

遺跡から検出されるイネの長幅比を年代順に並べると、紀元前七千年紀の賈湖遺跡稲から紀元前三千年紀後半の崧沢遺跡稲まで徐々に長さが減じ、幅が太る傾向を読み取ることができる。これと野生種の分布の北限である湖南省茶陵で採取されたものと比較すると野生種から栽培種の変遷をスムーズにたどることができる。江蘇省の龍虬莊遺跡の第5層で長さが再び長くなるイネが出現していることは、この時期にインディカ型のイネが栽培化されたことを物語っている。すなわち東アジアにおいては紀元前8000年頃ジャポニカ型からイネの栽培化が開始されたのである。

紀元前6000年から3000年前までは、稲作栽培の痕跡は黄河流域を北限として、それ以上の拡大は認められない。紀元前3000年以降山東半島先端部や遼東半島に分布が広がり、紀元前二千

年紀になり朝鮮半島にもその足跡が及ぶようになる。

### イネの栽培法

長江流域の先史時代稲朶が発見された遺跡では、古い時期からそのほかの栽培物を伴うことが知られている。浙江省跨湖橋遺跡ではマメとウリ、八十壩遺跡にはヒエ、ダイズ、シソなどがあり、淮河や黄河流域になると他の栽培穀物を伴う事例が一段と増加してくる。仰韶文化段階ではイネとアワの組み合わせが多く見られるが、龍山文化以降になると多様な栽培穀物が伴うことがしられる。例を挙げると山東省滕州市莊里西遺跡では、龍山文化の文化層からイネとともにキビ、コウリヤン、野生ダイズが出土し、兩城鎮の龍山文化層からイネ、アワ、キビ、コムギ、ダイズ、シソが検出されている。河南省王城崗遺跡では、龍山文化期にアワ、キビ、ダイズ、イネがあり、それらに伴う雑草と思われるキビ科やマメ科の種子が多くあり、殷代にはそれらにコムギが混じるとともに、イネの割合が減少している。山西省唐寺遺跡の夏代から殷代にかけてでは、アワが出土種子の7割を占め、キビ、イネ、オオムギ、ダイズにキビ科やマメ科の雑草が多く発見された。同様な傾向は陝西省周原遺跡でも認められる。殷代前期の洛陽皂角樹遺跡でも出土した穀物にはイネ、アワ、キビ、コムギ、ダイズ、シソが認められ、雑草としてのエノコログサが伴っている。

考古学的な所見によると、淮河以北、黄河流域では紀元前6000年の裴李崗文化以降、アワやキビが発見されていて、その後、イネがこの地域でも栽培されるようになったことを示している。黄河流域においては、イネを含む多様な栽培穀物が先史時代には存在していたのであった。長江流域で検出されるイネは湿地帯において栽培されたと想定されているが、黄河流域ではどうであったであろうか。このことを考えるときに最近発見された山東省でのイネの実例が良い資料となる。趙家莊遺跡では龍山文化期の多数のイネ朶が採取されているが、どれも細長く、胚の部分に縦方向に刻みを入れたような溝がみられ、発育不全のものばかりであった。これらの「溝」ができたイネは日本で言う「しいら」にあたり、日照不足、低温、水不足、あるいは栄養不良でできる。龍山文化期は温暖湿潤気候下にあり、日照不足や低温であったことが考え難いことから、7-8月の実が生育する時期に水分の供給が十分ではなかったことを物語っている。イネ朶がこうした状態を示すことは、黄河流域の先史時代遺跡から、エノコログサやキンエノコロ、タデ科やアカザ科などの雑草が多く発見されることとも通じ、紀元前三千年紀以前の黄河流域の稲は水田耕作ではなく、畑作栽培でもたらされた可能性が高いことを示唆している。

### 東北アジアの栽培穀物

柳田國男が日本列島に稲作がもたらされた契機として、タカラガイの重要性を取上げたのはあまねく人口に膾炙している。これは中国で殷代から周代に重宝されたタカラガイを求めて、琉球列島から稲作民が北上して列島全体に及んだとする壮大なロマンであった。また考古学者の一部は中国の長江（揚子江）流域から直接九州に稲作栽培技術が到来したと見ている。また農学者の中でも水田に伴う雑草が朝鮮よりも中国と類似性が高いことを指摘して、稲作の直接渡来説を提示する研究者もいる。このような中国長江流域から日本列島に直接イネが渡来した

という説に対して、今日の考古学的所見では容易にこれを否定することが可能である。

紀元前6000年以前、中国東北部の一部の地域ではアワやキビを主体とした畑作農耕文化が開花していた。内蒙古敖漢旗の興隆窪遺跡ではアワ、キビ、ダイズが多く出土し、中でもキビが多くみられる。炭化種子の中にはミミナグサやマメ科の仲間のキバナオオギの類が突出し、ヒユ科、タデ科が比較的多く認められた。このことは雑草と栽培穀物が共存していた状態を示している。

その後、畑作栽培は徐々にその分布を拡げ、紀元前三千年紀にはロシア沿海州南部地域にまで足跡をたどることができる。紀元前三千年紀に属する沿海州のクロフノフカ遺跡ではキビ、アワとともにエノコログサやイヌビエの種子が併せて検出され、この地域で栽培されていたことを明確に物語っている。さらに紀元前四千年紀末にまで畑作栽培が遡上する可能性もある。紀元前四千年紀後半の寒冷化現象が終息して、次第に温暖化するとともに、東北アジア北部地域にまで農耕文化の分布が拡大した可能性を示唆している。

中国東北部でのイネの種子の検出は遼寧省大連市の大嘴子遺跡が唯一の例である。考古学の編年上では双砬子3期にあたり、紀元前二千年紀後半期に属する資料である。この大嘴子遺跡は大連湾に突き出した平坦な丘陵上に立地する遺跡で、天水以外には水の供給が不可能な場所であり、イネとともにキビが検出されていることから、イネは畑作により栽培されたことを窺わせている。以上のことから中国東北部においての穀物栽培は基本的には畑作により営まれたとすることができる。

朝鮮半島では北部の智塔里、南部の東三洞遺跡でアワが採取されており、紀元前四千年紀後半期には確実に穀物の栽培が行われていたとすることができる。それ以降北部地域を中心として、アワ、コウリヤン、モロコシ、ダイズ、アズキなどの穀物とその組み合わせを少しずつ変化させながらも、農耕栽培は持続的に展開してきた。とりわけ朝鮮においてはマメ類が多く栽培されていたことが特徴となっている。

朝鮮にイネが登場するのは無文土器時代前期にあたる平壤市南京里遺跡が最初である。この遺跡は大同江の河岸段丘に立地し、その背後には低湿地が広がる地勢を見せている。この立地から水稻栽培を想定することも可能である。しかし、共伴する穀物にはアワ、キビ、ダイズ、モロコシなどがあり、水稻耕作が営まれていたにせよ畑作栽培の比重が高かったことを物語っている。

朝鮮南部での代表的な無文時代の農耕遺跡である大坪里でも、蛇行する河が形成した沖積地にありながら、畑の畝が検出され、そこからイネ、オオムギ、コムギ、アワ、キビなどの各種穀物が発見され、イネも畑作により栽培されていたことを示唆している。朝鮮南部地域でイネが検出された遺跡では畑作栽培に伴う雑草が多く検出されることから、基本的には櫛目土器時代以来の畑作栽培が卓越していたことを窺わせる。論山の麻田里遺跡では谷水田が検出されていて、確実な水稻栽培の資料として評価されている。しかし随伴雑草をみるとカヤツリグ科以外にアカザ科、タデ科、アブラナ科、タチカタバミなどもみられる。カヤツリグ科には田畑共通の雑草があることから、畑作に伴う雑草が優越しているといえる。このことは水田であっても十分な水の補給を欠く条件の下に栽培が為されていたことを示している。李朝時代の水田にもこのような4年あるいは5年単位で田畑を交換する田畑兼用の耕作地が多かったことを念

頭におくと、朝鮮では畑作栽培による穀物栽培が優越していたのではないかと思わせるのである。

表 田畑交換方式（李春寧1964による）

年次 区分	五年方式					四年方式			
	第一年	第二年	第三年	第四年	第五年	第一年	第二年	第三年	第四年
一区	粟	大麦 大豆	蜀黍	水稻	水稻	粟	大麦 大豆	水稻	水稻
二区	大麦 大豆	蜀黍	水稻	水稻	粟	大麦 大豆	水稻	水稻	粟
三区	蜀黍	水稻	水稻	粟	大麦 大豆	水稻	水稻	粟	大麦 大豆
四区	水稻	水稻	粟	大麦 大豆	蜀黍	水稻	粟	大麦 大豆	水稻
五区	水稻	粟	大麦 大豆	蜀黍	水稻				

### 終わりに

縄文時代後期後半期の九州ではイネやアワが存在することが、土器の胎土中で検出された資料により確実に捉えられている。それら穀物を出土した遺跡の立地からみて、畑作により栽培化された事も肯ける。一方水稻栽培は弥生時代早期にならないとその確認はできない。水田を形成するには、砂丘背後の後背湿地か、沖積低地の湿地帯を対象とするのが最も簡便であり、事実弥生時代早期の水田や遺跡はこうした環境に立地している。弥生時代において水稻栽培が急速に展開するのは、紀元前800年頃から始まった気候の寒冷化現象をうまく利用した結果にほかならない。

東北アジアでの穀物栽培は畑作が基本であり、水利条件が適的な場所で水田が営まれたというのが、紀元前二千年紀以降の東北アジアの実情といえよう。

椎葉芸能民俗博物館10周年記念講演会 2007年